

63 19世紀の日本人が見たパリ (2021年6月8日)

明治(1868-1912)政府は近代化を進めるために、欧米諸国に使節団を派遣しました。岩倉具視を特命全権大使とする岩倉使節団は、1871(明治4)年から1873(明治6)年の1年10か月をかけて、アメリカ、イギリス、フランス、オランダ、ドイツなど12か国を訪問する世界一周の旅をしました。この使節団派遣の目的は、①江戸時代後半(1840-1850年代)以降に条約を締結した国に対する国書の提出、②①で締結した不平等条約改正に向けた予備交渉、③西洋文明の調査でした。しかし、最初に訪問したアメリカで条約改正の予備交渉に失敗したことから二つ目の目的は諦めて、訪問先の国家制度の調査と産業技術や文化の視察を行いました。



De gauche à droite, KIDO Takayoshi, YAMAGUCHI Masuka, IWAKURA Tomomi, ITO Hirobumi, OKUBO Toshimichi
左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通

使節団は、1872年12月から約2か月間をパリで過ごしました。当時のティエール大統領を表敬し、凱旋門、ノートルダム大聖堂、軍の学校や施設、建築や鉱山の学校、ゴブラン織やセーブル焼の製作所、チョコレートや香水の製造場、国立図書館、病院など数多くの場所を視察しました。一行は、ベルサイユ宮殿やフォンテーヌブロー城にも足を伸ばしました。

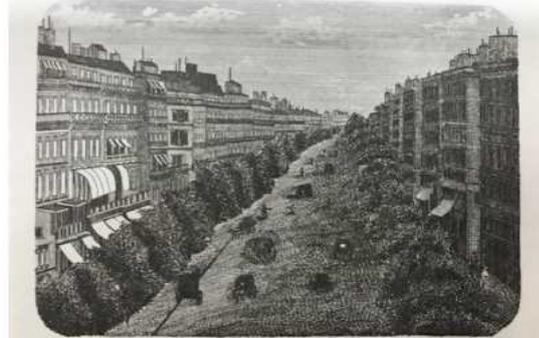
使節団の公式報告として、随員の一人であった久米邦武が編纂した「米欧回覧実記」が1878(明治11)年に刊行されました。これは、全百巻を五編にまとめた百科事典のような詳細な記録で、銅版画による美しい挿絵が添えられています。私は、19世紀の日本人が、当時のフランスをどのように観察したのか知りたくなり、現代日本語で書かれた解説書の助けを得ながら「米欧回覧実記」のフランス滞在部分の記録を読みました。第三編は、「フランスは、ヨーロッパの最も開けた中央部分にあって、様々な産物が行き交う文明進展の中枢である。」という一文から始まります。パリの街並みについては、凱旋門からコンコルド広場まで一直線に伸びるシャンゼリゼ通りがあり、夜にはガス燈の光が輝いていたことを述べた上で、「(コンコルド広場にある)オペリスクの東にはイタリア大通りがあり、五階から七階建ての大きな商店が立ち並ぶパリで一番美しい通りである。」と記しています。ここで述べられている場所は、現在のオペラ座(オペ

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

ラ・ガルニエ) 付近です。当時はまだオペラ座はありませんでしたが、当時から賑わう界隈であったことがわかります。ヨーロッパ貴族社会で使われる言葉と貴婦人のファッションや髪型といった流行は、常にパリから生まれていることも記しています。



Obélisque dans la Place de la Concorde à Paris
巴黎「コンコルド」苑ノ「オブリスキ」塔
© musée KUME/久米美術館



Les Grands Boulevards à Paris
- le plus beau quartier de Paris -
巴黎「ブールヴァル」大通り〈巴黎第一ノ美街〉
© musée KUME/久米美術館

この記録では、ナポレオン三世がパリ近郊に工場を誘致して労働者向けの住宅を建設し、労働者階級の生活水準の向上を目指した社会福祉政策を評価しています。また、ヴァンセンヌ城に隣接する兵舎を見学した際には、兵舎は粗末であっても誇りを持って任務に当たる気概のある将校と出会って感激したことも書かれています。

使節団の一行は、パリの華やかな街並みを見ただけではなく、日本の新たな国作りに必要な政策や人材についても学んだことが、「米欧回覧実記」の記録から読み取ることができます。